

抽象と形態：何処までも顕れないもの

The Unseen Relationship: Form and Abstraction

2012年1月14日(土)～4月15日(日)

私たちを取り巻くあらゆる物理現象や精神世界を、自らの眼差しと手によって描き顕すことに情熱を燃やす7人の現代美術家にスポットを当て、彼らの創作に影響を与えたモネ、ピカソ、サイ・トゥオンブリーなど、当館のコレクションを中心とした参照作品と共に展覧します。約80点の展示作品から視覚芸術における抽象と形態の隠れた関係性を探ります。



五木田智央 《Acapulco》
2011年 作家蔵

- 開館時間 9:30-17:00 (入館は 16:30 まで)
- 休館日 月曜
- 入館料 一般 1,200 円 (1,000 円) / 65 歳以上・学生 1,000 円(800 円) /
高校生・小中学生 500 円(400 円)
※ () 内は 20 名以上の団体料金
※2月15日(水)は DIC 株式会社創立記念日のため無料開館
- 会場 DIC 川村記念美術館 (千葉県佐倉市坂戸 631 番地)
- URL kawamura-museum.dic.co.jp
- 主催 DIC 川村記念美術館
- 後援 アメリカ合衆国大使館 / 千葉県 / 千葉県教育委員会 / 佐倉市 / 佐倉市教育委員会

.....<取材および資料請求のお問い合わせ先>.....

DIC 川村記念美術館 tel. 043-498-2672 / fax. 043-498-2139 (掲載用 0120-498-130)

広報担当 林里絵子 rieko-hayashi@ma.dic.co.jp 学芸担当 鈴木尊志 takasi-suzuki@ma.dic.co.jp

展覧会 概要

モノクロで描かれた人物画が見るものに強い印象を与える五木田智央。眼には見えない現実を写し取ろうとするスウェーデン生まれの写真家アンダース・エドストローム。柔らかな色彩と繊細な形態が溶け合う絵画を描く角田純。静謐で深みのある色面に光の本質を求めるフランシス真悟。水面に映る多彩な情景をダイナミックに描く野沢二郎。遠い記憶の心象風景を絵画空間に呼び起こす赤塚祐二。そして、重厚な油絵の質感の中に色彩の形を探求する吉川民仁。

上記、現代の7人の作家たちの最新作とともに、モネ、ピカソ、ブラック、ヴォルス、モランディ、サム・フランシス、アド・ラインハート、サイ・トゥオンブリーなど、20世紀美術に多大な影響を与えた芸術家の作品を同時に展覧いたします。文化や時代は様々に異なりますが、「対象の本質を如何に顕すのか」という近代芸術の重要なテーマが、個々の作品に脈々と継承されていることを、実際の作品を通して感じて頂ければ幸いです。

見どころ

1 <色彩としてのモノクローム>

今回出品される五木田の作品はすべて、白と黒の二色の絵の具(アクリル・グワッシュ)によって描かれています。西洋絵画の古典技法ではこれはグリザイユと呼ばれる、着彩前の下絵制作に使われていた技術ですが、不思議なことに五木田の作品をよく観るとグレーの色調の中に青や紫などの色味が感じられます。彼は絵画の形式には拘泥せず、思いのままに自分の世界を描ききる勇気と才能を持ちあわせた画家といえるでしょう。同じ部屋に当館所蔵のピカソ《シルヴェット》が展示されます。白と黒に加えて茶色が使われているので、これは古典的というかマイユ技法に当たります。73歳のピカソは、着衣という約束でモデルになることを承諾した19歳のシルヴェットを裸婦として描いています。モデルの一瞬の表情を捉えながら、裸体の部分は想像力を駆使し、キュビズム風の処理を施しています。



パブロ・ピカソ
《シルヴェット》1954年
油彩、カンヴァス
100×81cm
DIC 川村記念美術館

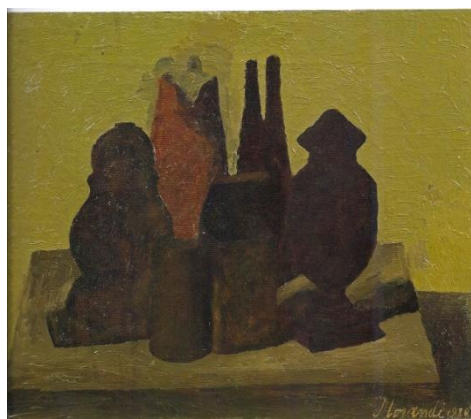
©2011-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)



五木田智央
《Scorn》2011年
アクリル・グワッシュ、カンヴァス
227.3×181.8cm 作家蔵

2 <不思議なオーラに包まれた絵画>

イタリアの個人コレクションから、モランディの珍しい初期作品を初めてご紹介します。後期作品に比べて、しっかりと絵の具が盛られており、個々の形態の持つ特徴を正面から捉えようとしていたことがわかります。この作品にはすでにモランディ独特の静寂とした抽象的空間のイメージが漂っているようです。角田の作品は良い意味で、抽象とも具象ともとれる曖昧な絵画空間の中に浮遊する不可思議な形態が、絶妙の色彩感覚によって表現されています。一見して出会うはずの無い、この二人の作品は互いの深部において、共鳴し合う何ものかがあるように思われるのです。



ジョルジョ・モランディ
《静物》1920年
油彩、カンヴァス
33×38cm 個人蔵

©SIAE, Roma & SPDA, Tokyo, 2011



角田 純
《Maïna》2005年
アクリル、木製パネル
100×73cm 作家蔵

3 <現実を成立させているものの不思議さ>

本展には個性的なヴォルスの絵画が2点出品されています。彼の作品は心の中に浮かび上がるイメージをできる限り恣意的にならないように、画面に解き放っているように感じられます。エドストロームの写真作品は、現実の世界を恣意的にならないようにそのままに写し取っているのが特徴です。二人は作家として互いに異なる表現分野にありながらも、人間の意識と無意識の境界を行き来する芸術的な眼差しにおいて、共通する美の水脈を見取ることができるのではないのでしょうか。



ヴォルス
《無題》1950年
24.0×28.5cm
個人蔵

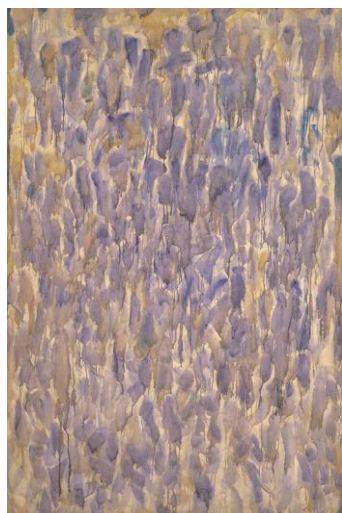
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011



アンダース・エドストローム
《無題》2011年 作家蔵

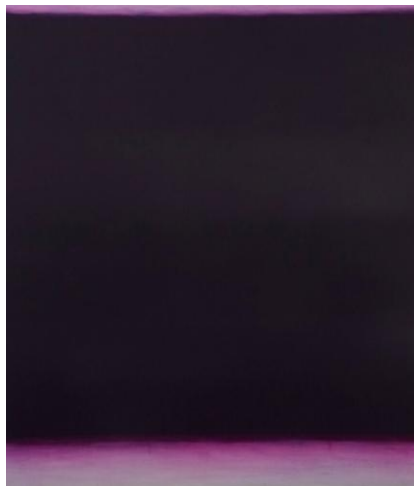
4 <引き継がれる画家の魂>

当館所蔵のサム・フランシス《無題》は、29歳の時に描かれた初期の代表作として位置づけられます。サムの息子として生まれ、同じく画家の道を選んだフランシス真悟は、深みのあるモノトーンの色彩による絵画を粛々と制作してきました。今回出品された紫のシリーズの画面には、これまで明確であった水平線が消え、茫漠とした深い透明感のある色面が顕われてきています。この二人の作品を並べて鑑賞する機会はおそらく今回が初めてであるとともに、当館のアド・ラインハートの黒一色のトロアトーンも同時に展観することも楽しみのひとつとなることでしょう。



サム・フランシス
《無題》1952年
油彩、カンヴァス
194.5×129.7cm
DIC 川村記念美術館

©2011 Sam Francis Foundation, California /
ARS, N.Y./ SPDA, Tokyo



フランシス真悟
《深淵(紫)》2011年
油彩、カンヴァス
153cm×132cm 作家蔵

5 <共通する絵画構造>

赤塚祐二の作品は、一見して、これは稚拙な絵なのではないかと思わせるようなところがあり、それが最大の魅力となっています。本来、技巧派である彼が、理想とする無垢な絵画空間を実現するために用いたテクニック、それは、垂直と水平という二つの要素に絞り込んで全体に遠近感を与えながら、そこに純粋な描線を繰り返し描くことで、山に登るようにして、未知の世界に足を踏み入れることではないかと思われまます。赤塚は当館のジョルジュ・ブラック《水浴する女》をたまたま見る機会があり、その時に、この作品が自身の《another mountain》シリーズに通じる絵画構造をもっていることを指摘しています。



ジョルジュ・ブラック
《水浴する女》 1926年
油彩、砂、カンヴァス
130×74cm DIC 川村記念美術館

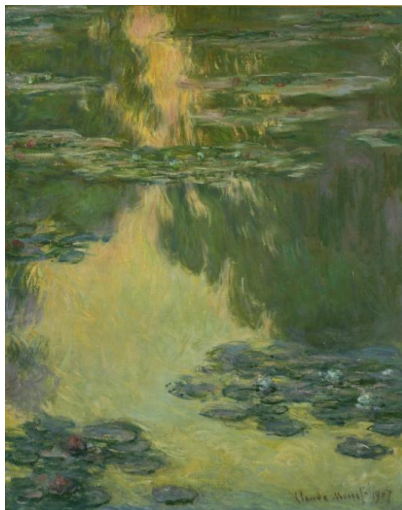
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011



赤塚祐二
《赤い絵》 2010年
油彩、カンヴァス
227×180cm 作家蔵

6 <水面に映る風景>

野沢二郎の《After Rain/記憶》は、雨上がりの水たまりに映り込む空や樹木を、記憶と感性によって抽象的に表した作品です。画家は本作の画面上部の中央に描かれた樹木の影によって、鑑賞者の視線を画面から上方へと導いてゆく上昇の効果を持たせています。本展では当館のモネ《睡蓮》を野沢の作品とともにご覧いただきますが、同様に《睡蓮》を観ると、湖面に映り込む明るい空の面積は三角形の構図になっていて、観るものの視線を自然に上方へと導いていることがわかります。



クロード・モネ 《睡蓮》 1907年
油彩、カンヴァス 92.5×73.5cm
DIC 川村記念美術館



野沢二郎 《After Rain /記憶》 2008年
油彩、カンヴァス 117×81cm 個人蔵

7 <オマージュからスタイルの確立へ>

吉川民仁が自己のスタイルを形成する過程で最初に影響を受けた作家は、ドイツの画家アンス・アルトゥング(1904-1989)でした。そして、もうひとりの芸術家は 2011 年に亡くなったサイ・トゥオンブリーで、立体作品にも興味があったことは、彫刻を最初に学んだ吉川にとって必然的な出会いであったといえるでしょう。トゥオンブリーと吉川に共通するスタンスは、画布、筆、絵の具、ペインティング・ナイフなどの材料を駆使して、形態や色彩を記号的に扱いながら、最終的に、視覚的な美の焦点に絞り込んでゆくという技法にあります。最近の吉川の作品には、色彩と色材のバランスに独自の調和が認められます。



サイ・トゥオンブリー 《無題》 1968 年
家庭用塗料、クレヨン、カンヴァス 200×259cm DIC 川村記念美術館
©Cy Twombly



吉川民仁 《対話》 2010 年
油彩、カンヴァス 227.4×162cm 作家蔵

作家プロフィール

五木田智央 (1969-)

東京都生まれ、東京都在住。

2000年、リトルモアより作品集『ランジェリー・レスリング』を出版。カルト的な人気を集める五木田の初期作品は、おもに紙に即興的に描かれたドローイングであり、展覧会の場で発表されるだけでなく、むしろイラストレーションとして、また美術系雑誌を媒体として数多く発表されている。近年に描かれたキャンバスにグワッシュを用いた白黒のシュールな人物像は、いち早くニューヨークで注目され、現在、美術の世界にとどまらず各方面に活動の場を広げている。

個展:「Funland」(2010年 Aliceday ブリュッセル)、「HEAVEN」(2009年 HONOR FRASER ロサンゼルス)、タカ・イシイ・ギャラリー(2009年)、「Wildest Dreams」(2010年 ATMギャラリー ニューヨーク)、「ランジェリー・レスリング」(2000年 渋谷パルコギャラリー／名古屋パルコギャラリー／福岡アルティウム)他。グループ展:「Black and White」(2011年 NANZUKA UNDERGROUND 東京)、「VOCA展 2009 現代美術の展望—新しい平面の作家たち」(2009年 上野の森美術館 東京)他。出版物:作品集『ランジェリー・レスリング』(2000年 リトルモア)他。

アンダース・エドストローム (1966-)

スウェーデン、フロソ生まれ、東京都在住。

写真家、映像作家。1990年にパリに移住。デザイナー、マルタン・マルジェラと仕事を始め、以後、長きにわたってメゾン・マルタン・マルジェラとのコラボレーションを続ける。フランスの雑誌『Purple』を始めとする国内外の雑誌での作品発表や、ファッションブランドのキャンペーン撮影を手がける。2001年より数本にわたる映画をC.W.ウインターと共に製作。デレク・ベイリーをフューチャーした『One Plus One 2』ほか、ナレーションスタイルの『The Anchorage』では2009年ロカルノ国際映画祭で金豹賞を受賞。2004年より東京に居住。

個展:「Baptême」(2009年 ギャラリー・トラックス 山梨)他。グループ展:「Not in Fashion」(2010年 Museum für Moderne Kuns フランクフルト)、「第2回恵比寿映像祭」(2010年 東京都写真美術館)、「Elysian Fields」(2000年 ポンピドゥー・センター パリ)他。フィルム作品:『The Anchorage』(2009年)、『One Plus One 2』(2001年)。出版物:『safari』(2010年 Nieves)、『Waiting some birds and bus a woman / Spidernets places a crew』(2004年 SteidlMACK)他。

角田 純 (1960-)

愛知県生まれ、東京都在住。

多摩美術大学卒業後、1980年代から広告・出版業界でアートディレクターとして才能を発揮し、グラフィック・デザイナーとしても高い評価を得る。ライフワークとして描いてきた絵画作品を2000年頃から本格的に発表し注目を集める。アクリルによる絵画作品の他、水彩やコラージュ、シルクスクリーンなど、さまざまな素材を使いながら、音楽的感性が溢れる豊かな色彩と描線を描き出す。

個展:「sounding through」(2010年 FOIL GALLERY 東京)、「yama-biko」(2010年 ギャラリー・トラックス 山梨)「如意樹」(2010年 FOIL GALLERY 東京)、「TRANSMISSION」(1998年 スターネット 栃木)他。出版物:作品集『Cave』(2009年 FOIL)、『MEXICO ICONS』(小野一郎との共著 2000年 アスペクト)。

フランシス真悟 (1969-)

カリフォルニア州サンタモニカ生まれ、ニューヨーク在住。

画家。ピッツァー大学で美術学士を取得したのち、日本で本格的な作家活動に入った。深い群青色のモノトーンの透明な世界を、最小の構成要素によって絵画として成立させた連作により画家としてのスタートを切った。油彩画と平行して、大気圏に顕れる光の現象を色彩に置き換えるための実験として、大判のロール紙に水彩で光学的現象を描くドローイングを行っている。

個展:「Veils: a dialogue with the abyss」(2011年 ギャラリー・パリ 神奈川)、「Bound for Eternity」(2009年 モンタルボ・アートセンター カルフォルニア)、「Blue's Silence: ashes in darkness」(2008年 ヒノギャラリー 東京)、「Hoop Art」(2010年 カサ・デル・マー・ホテル カルフォルニア)他。グループ展:「Art as Expression of Being」(2011年 Checkpoint Ilgen ベルリン)「Ties over Time」(2010年 駐日米国大使公邸 東京)、「Elements of Nature」(2010年 Contemporary Art Center New Orleans ニューオリンズ)、他。

野沢二郎 (1957-)

茨城県生まれ、茨城県在住。

筑波大学大学院芸術研究科修了後、高校の美術教師を長く勤め、現在は明星大学で教鞭をとっている。油絵具という素材を正面から受け止めて退くことのない精神的な強度が、そのまま作品の魅力に繋がっている。特製ゴムベラ(スキー ジ)を駆使して、体全体を使ったストロークには、自然現象と同化していく繊細な眼差しが込められているようである。

個展:「水面の陰翳」(2011年 コバヤシ画廊 東京)、「After the Rain」(2009年 ギャラリーしえる 茨城)、「三つの絵画」(2007年 六角堂/岡倉天心遺跡 茨城)他。グループ展:「現代茨城作家美術展」(2007年 茨城県近代美術館)、「自然のことば、美術のかたち」(2001年 日立市郷土博物館 茨城)、「バングラデシユ・アジア美術ビエンナーレ」(1997年 Honourable Award受賞)、「VOCA展1997」(1997年 上野の森美術館 東京)、「ディアロゴス1996・現代性の条件」(1996年 水戸芸術館 茨城)他。

赤塚祐二 (1955-)

鹿児島県生まれ、千葉県在住。

東京藝術大学大学院修士課程修了。在学中には油彩画と版画を専攻した。卒業後、グラフィックデザイナーやイラストレーターの仕事を試みたが、新たな決意を持って画家を志した。初期の《canary》シリーズにおいて、影のような形象が大画面に現された作品が高く評価される。最新の《another mountain》シリーズにおいて赤塚は、これまでより高い次元の絵画構造の理論的展開を試みている。

個展:コバヤシ画廊(東京)、鎌倉画廊(鎌倉)、ガレリアフィナルテ(名古屋)、ギャラリエアンドウ(東京)、村山画廊(東京)、他。グループ展:「山川の間で—アートプログラム青梅」(2011年 青梅市立美術館 東京)、「絵画の力—80年代以降の日本の絵画」(2003年 東京都現代美術館 東京)、「かたちを求めて—11人の日本作家」(2001年 釜山市美術館 プサン)「視ることのアレゴリー:絵画・彫刻の現在」(1995年 セゾン美術館 東京)、「現代美術の視点 形象のはざまに」(1992年 東京国立近代美術館 東京)。出版物:『ことり』(西元直子の詩による詩画集)他。

吉川民仁 (1965-)

千葉県生まれ、千葉県在住。

武蔵野美術大学大学院修士課程在籍中に、同大学教授の藤枝晃雄氏の推薦を受け、鎌倉画廊で初めての個展を開催して以降、同画廊を中心に作家活動を行っている。絵画修復の経験を有する吉川の作品は、材料学的な知識が活かされている側面もあり、画布上で展開する絶妙な色彩混合と、表面の絵具層が持つ触覚的な要素が、鑑賞者の眼を捉えて離さない。職人的な気質と繊細な感性が融合した作家といえる。

個展:「吉川民仁展」(2011年 古美術長野 東京)、「net」(2011年 日本橋高島屋画廊X 東京)、「kind of green」(2009年 鎌倉画廊 神奈川)他。グループ展:「China Fifth Art Industry Forum」(2004年 National Museum of China 北京)、「Chiba Art Now '01 絵画の領域」(2001年 佐倉市立美術館 千葉)、「ART BASEL」(1994年 '95'96'97'98 スイス)他。出版物:『日本—短い詩の本』(2003年 伊藤英二編 吉川民仁画 岩崎書店)。

関連イベント

■講演会

「抽象と形態：何処までも顕れないもの」

3月18日（日）14:00-15:30 | 聴講料=入館料のみ

大島徹也氏（愛知県美術館 学芸員）

アメリカ抽象絵画を専門とする大島徹也氏（ジャクソン・ポロック展企画）に、現代の抽象絵画と形態とのかかわりについて解説していただきます。

◎当日 12:00 より美術館受付で希望者（先着 60 名）に整理券配布

■作家によるギャラリー・トーク | 先着 60 名 エントランスホール集合

1月14日（土）14:00-15:00 フランシス真悟

3月11日（日）14:00-15:30 アンダース・エドストローム 角田純 五木田智央

3月25日（日）14:00-15:30 赤塚祐二 吉川民仁 野沢二郎

■学芸員によるギャラリー・トーク

1月29日（日）・4月15日（日）14:00-15:00 | 先着 60 名 | エントランスホール集合

■千葉市美術館との連携

千葉市美術館「瀧口修造とマルセル・デュシャン」展（11/22-1/29）との相互割引

チケットの半券（有料券）をご提示いただくと、入場料が割引となります。

千葉市美術館 一般 800 円→640 円、大学生 560 円→450 円

DIC 川村記念美術館 一般 1200 円→1000 円、学生・65 歳以上 1000 円→800 円

無料送迎バス

◎1月14日（土）・15日（日）、21日（土）・22日（日）、28日（土）・29日（日）

上記 6 日間、二館を結ぶ無料送迎バスを運行

千葉市美発 13:00/15:00→DIC 川村記念美術館

DIC 川村記念美術館発 14:00/16:00→千葉市美術館